

この本を薦めます

学会誌前編集委員長 佐々木 葉

第 22 回



磯部雅彦

第102代土木学会会長

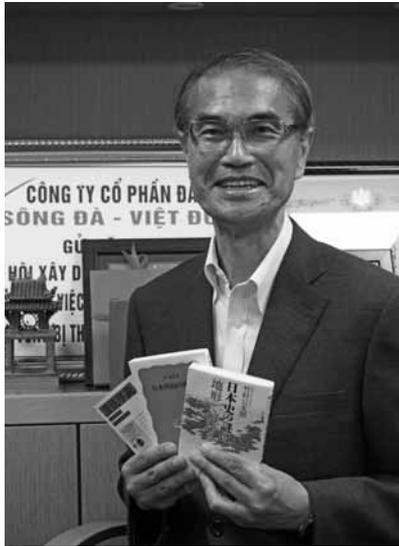
今月は、第102代土木学会会長の磯部雅彦先生に、時間のスケールを横断して、土木と自己を位置づける基点となる3冊をご紹介します。

6月に会長に就任されるやいなや、100周年記念事業で大変お忙しい、分刻みのスケジュールでございながら、磯部会長が選ばれたのは、千年、億年という時間スケールと向き合いながら、土木の仕事、自分という存在を位置づける基点となる3冊であった。

2冊と1冊と括られた上で、地形にかかわる2冊から、まずは学会誌にも

たびたびご登場いただいている竹村公

太郎氏の『日本史の謎は「地形」で解ける』。土木とは国土をつくる仕事であり、それは地形と深く関わる。よって土木技術者は地形の見方を基礎的素養として知って欲しいと会長はおっしゃる。竹村氏は長年の河川行政の経験において、自然の地形にそって流れていく水を眺め続け、そこから普通の人では考えられない地形を読み解く



ISOBE Masahiko

1952年東京生。東京大学土木工学科卒。横浜国立大学講師・助教授、東京大学助教授・教授を経て2013年より高知工大副学長。第102代土木学会会長。

力を獲得された。たとえば信長の比叡山延暦寺焼き討ちの理由は、日本列島の東側から京都に入る唯一のルートである

逢坂山を上から見下ろす視線に恐怖したから、という具合である。賛否をこえてこうした刺激的な見方は脳をアジテートし、さまざまな発想を促してくれる。いまやシリーズとなったこの本は、読みものとしても楽しい。竹村氏の本が千年スケールの地形であるのに対して、平先生の『日本列島の誕生』は、億年スケールの地形と向き合う本である。2億年前のプレートの動きによって現在の地形と地質はつくられ、それは地域の産業につながっている。この本を通して日本列島の奇跡のような特性を学び、動いている地形のなかで土木がどういう活動をしてきたかを考えることができる。

最後のデカルトの『方法序説』は、無限時間スケールの中で自己を見つめるための本として挙げていただきたい。会長は高校3年生の時に初めてこれを読み、自分という存在への不安に対する原点を得たとおっしゃる。有名なフレーズ「我思う故に我あり」を含むページ、あるいは第4部だけでも読んでみることをお勧めすることである。国土の防護・環境保全・利用の全部を良くしていく仕事である土木。その専門家である土木技術者は、億年、千年という単位で存在する地形に對峙し、わずか数十年の人生で成しえることとその意義を考える。そうした「考える我」という自身の哲学の必要性。何事も突き詰めて考えようとする会長の選ばれた3冊は、会員の皆さんへのメッセージと受け止めたい。



日本史の謎は『地形』で解ける

竹村公太郎：PHP文庫



日本列島の誕生

平朝彦：岩波新書



方法序説

デカルト 谷川多佳子 訳：岩波文庫